

第一回 風の末裔

—

むかしのことだ。

砂漠に近いこの村にはよく大風が吹いて、人々は
ずいぶんと苦しい生活をしてきた。

それを見かねた風神がこの地に降りてきて、村人
の一人に風を操る力を与え、そのしるしとして薄衣
を贈った。

以来、この村から風の災いは消え、砂漠を旅して
きた者たちの憩いの場として栄えることになった

…らしい。少なくとも、じいさまはそう言っていた。

たしかに、ここは妙な村なんだ。砂漠に近くせ
に水も豊富で、暑くもない。これはすべて、この村
に一年中吹いている爽やかな風のおかげ。この風が、

乾燥や暑さから村を守っているんだ。

この風を作り出しているのが、風使い。伝説にあ
る、風神から力を授かった村人の子孫で、それぞれ
風にちなんだ名前を持っている。

この気候のおかげで、この村は、交易の道筋から
外れてる割には、多くの住人がいるし、旅人も多く
立ち寄ってくれる。本当に平和な村なんだ。

…でも、長い間平穩に暮らしていたせいか、みん
な、あの風がなぜ吹いてくるのかさえ忘れちまった
みたいだ。

二

俺の名前は颯と言つ。

今は、この村で鍛冶屋をしている。正式に習った
わけじゃないが、親父が鍛冶をやったもんで、自
然に覚えた。まあ、門前の小僧といったところか。

数年前に、華包じいさんて言う、この辺じゃ有名な鍛冶の名人からもふいごを譲ってもらったくらいで、いまじゃすっかり村一番の鍛冶屋になつてる。

この村の主な産業は、宿屋のほかには農業と、あと近くの山で採れる玉を使った細工物。だから俺が鍛えるのも、農具やノミの類が多い。

いっぺんくらいは、剣なんかも打つてみたいんだけど、この村にいる限り、そんな仕事は回つてきそうもないな。

さて、今入つてる仕事は友人からで、鍛だ。

鍛みたいなのは農具は、他の土地では鑄造と言って、鉄を型に流し込んで作るらしい。この方が安上がりだし、誰でも簡単にできるんだけど、ここの地面は結構硬くて、鑄造物じゃすぐに駄目になつちまう。そこで、俺のところに仕事に来るわけだ。

昨日やっと鉄のいいのが入ったんで、俺は早速、鍛

作りに取り掛かることにした。

仕事場に入る。ふいごと火桶、それに鎚と鋏がいくつがあるだけの、簡単な仕事場。たったこれだけのものの中に、いい鉄が投げ込まれると、とたんにそれは姿を変える。それは鍛だつたり、ノミだつたり、場合によつては、剣だつたりする。

子供の頃、俺はそれが不思議でしょうがなかった。幼なじみの香風と一緒に、親父の仕事場をのぞき込むたびに、親父がまるで仙人のように思えたものだ――

火桶に火を入れ、ふいごで風を起こすと、火は勢いよく燃え上がる。すると、薄暗い仕事場が、ぱあっと明るくなって、まわりまで燃えるように暑くなる。これが普通。ところが、ここじゃその割に暑くはないんだ。今さらながら、じいさまの力には感服するしかない。

じいさまは、風使いだつた。この村を暑さから守

3 第一回 風の未裔

る、あの風使いだ。半年ほど前に死んじまつたんだけど、生前に使つたその力は、今なお衰えていない。もしかしたら、このあと風使いは要らなくなるかも知れない、なんて言われているくらいだ。

本来なら、じいさまの跡を継ぐのは、親父だった。親父もその気になっていたし、何も問題ないはずだった。はずだったんだけど…

鉄を火桶に入れて、ふいごを何度か動かすと、お天道さまにも負けないくらい、真つ赤に光り輝く。それを鑊の上に乘せて、鎚で叩く。

カーン、といい音がした。鉄がいいと、張り合いがあるもんだ。

ある程度打つたところで、今度は鉄を半分に分る。折つたらまた火桶に入れ、真つ赤にしてからまた鑊の上で叩く。これを何回、いや、何十回と繰り返さない、強い鉄…鋼にはならないんだ。

何度か折り畳んだところで、夜に入った。俺は、鉄を焼けた砂の中に埋めて、今日の仕事を終えた。

三

翌日。砂の中から鉄を引つ張り出して、鋼作りを再開する。前に聞いた話じゃ、鉄を作りやすい土地と、作りにくい土地があるらしい。土地によつては、この作業に一日もかかなくて済む場合もあるらしいんだ。…でも、その土地じゃ、これほど涼しく作業は出来ないだろう。ま、すべてうまくはいかないもんだ。

真つ赤な塊を必死に打つ。と、別の音が入ってきた。誰か来たようだ。

「颯、いないの？」

どうやら香風らしい。前に言つたけど、俺の幼なじみで、やっぱり風使いの血を引く一人だ。

親父は随分と彼女を可愛がっていた。実際、親父

が死んだとき一番悲しんだのは、俺でもじいさまでもなくて、彼女だったくらいだ。

取り敢えず、俺は鉄に砂をかぶせて、戸を開けに行った。

香風をはじめてみた人なら、まずどこかのお嬢さんだと思っただろう。顔立ちは一応整ってるし、普段は楚楚として見えるからだ。実体はと言つと…ふわりとした服の下に、胡服スボクを着けた姿が、その本性をよく表していると俺は思つた。

「仕事中は、来るなつて言つたら」

「あら、風使いの仕事中なら、邪魔しないわよ」

そつ、今は俺が風使いなんだ。…名前だけだだけど。

こいつは、俺がその仕事をしないのが気に入らないらしくて、ちよくちよくちよつかい出してくるんだ。まあ、気持ちにはわからなくもないけど、こいつだって知ってるはずなんだけどな。俺には出来ないってことを。

親父が死んで、ひと月ばかりした頃。じいさまのお使いで、香風の家に行ったときのことだ。あいつの家の近くまで来たとき、俺は、あいつと、あいつの両親の会話を聞きちまった。

『颯が風使い？』

『そりやそつさ、あのじいさまの親戚は、あの子しかいないんだから』

『颯なんてただの養子じゃない！』

風使いの血も引いてないのに、叔父様の替わりになんかならないわ！』

これを聞いて、俺は泣きながら、走って家に帰った記憶がある。

「ちよつと颯、聞いてるの!?」

おつと、うつかりしてた。ま、用事はいつも同じだから、聞かなくてもわかるけど。

「同じことを何度も言わせるなよ。やりたきゃ、自分でやればいいだろ」

5 第一回 風の末裔

見る間に、こいつはむくれた。

「なら、どうして引き受けたりなんかしたのよ！」
「やっぱり、いつもと同じ展開だ。」

「あのなあ…あの状況で、断れると思うか？」

じいさまが死んだのは、今から半年ほど前。その間際、病の床に俺と、香風の家族を呼んで、その場で風使いを俺に譲ったんだ。

寝耳に水っていうのはこのことだ。

何せ、じいさまに引きとられてからも、風使いの修業なんて一つもしてない。俺は毎日、親父の残した仕事場で鍛冶屋の修業をしながら、過ごしていたんだから。

でも、ほとんど遺言なんだから、断りようがない。そんなわけで、俺は風使いを引き受けちゃったんだ。けど、たしかに厄介なんだな。風使いは二年以上経たなければ、譲ることが出来ないことになってる。つまり、名前だけとは言え、これからさらに一年半

は俺が風使いをしなけりゃならないってことなんだ。

「いまさら、どうしようもないだろ。…とにかく、俺は名前だけの風使いだよ。別に、他の人間が風使っちゃいけないってことはないんだから、やりたきゃ勝手にやれよ！」

むくれにむくれたあいつは、ひとこと下品な言葉を吐いて、引き上げて行った。

俺は仕事場に戻って、また鉄を鍛えはじめた。

四

次の日の夕方。一日の仕事を終えて、一息入っていたときに客が来た。

「颯ちゃん、いるかい」

「あいよ。…なんだ召園か」

こいつも香風と同じ、幼なじみ。

その昔、大風が吹いてこの村が砂に埋まりそうになったとき、こいつのひいじいさんと、若い頃のじ

いさまとが一緒になって、村を元通りにしたってはなしがある。

だからなのかもしれないが、もの心ついたときから、こいつとは仲がいいんだ。

「わるいけど、鎌ならまだ仕上がってないよ」

「いや、催促さいそくに来たわけじゃないんだけど……」

「やれやれ、この優柔不断ゆうじゅうふたんだけは、何歳いっさいになっても治なおらないな。」

「……やっぱり、風使いにはなってくれないのかな」

「その話なら、前に言ったはずだぜ。俺は風の血なんか引いてないんだ。頼むんなら香風カウフウんとこ行きなよ」

「血なんか関係ないよ。老風ラウフウのおじいちゃんが認めただから。意地張らないで、あの衣を着けてよ」

俺は、ちよつと頭が痛くなった。怒鳴どなりつけるのは楽なんだけど、むかしからこの目にはどうも弱くて……

「……お前にだけは白状するけどな、実は、俺も何度か試したんだよ。風が使えるかどうかを、な。でも、何度やってもダメだったんだ。」

じいさま程の風使いでも、やっぱり年齢としにゃ勝てないんだなあ……」

俺も召園も、しばらくうなだれていた。と、いきなりこいつが跳ね起きて、俺の胸に掴つかみかかってきた。

「颯ちゃん。ひよつとして颯ちゃんは、香ちゃんに遠慮してるんじゃないの？」

僕のおじいちゃんがよく言ってたよ。一年に一度、大風が来るんだって。風使いがいなければ、こんな村、絶対に耐えられないんだって。

ねえ、衣を着けてよ。本当に風使いになれない人なら、あの衣は着けられないはずだよ」

たしかに、召園の言う通りで、この地には、一年に一度大風が来る。これを治おさめるのも風使いの役目なんだ。

五年前、親父が風使いになったときにも、やっぱり大風は来た。けれど親父は、これを治めるんじゃないかと、永遠になくそうと思っていらしい。……今

7 第一回 風の未裔

にして思えば、俺があの大風を治められないことが
気がかりだったんだらう。

薄い鋼はがねの鎧よろいを着けて、一人で大風と対峙たいしして：
そして、負けたんだ。

親父の体が、風の中でバラバラになっていくさま
を見て、俺は言葉を失ったし、香風は落ちてきた鎧を
抱いて、ただ泣き叫んでいた。そのとき十歳とおになっ
たばかりの俺たちには、他にどうすることも出来な
かった。

『俺に力があれば…』この思いは、香風も同じだっ
たようだ——

召園の真剣な目が、まだ俺を見つめている。…これ
が、ひいじいさんの『血』、なのかもしれない。俺に
はどうしても、この目をまともには見られない。胸
を掴んだ手をひっ剥むして、言った。

「俺は、風使いじゃないよ」

あいつは、本当にかっかりした目で帰って行った。

俺は、鉄を砂の中に埋めて、はやばやと寝床に入
った。

五

鉄を鍛えはじめてから四日目になる。そろそろ鋼
らしくなってきた。きょう一日で、なんとか仕上げ
ちまおう。

こうなると、ほとんど食事も抜き。とにかく、打っ
て打って打ちまくる。客が来たって相手なんかできな
いんだけど、こういう時に限って来るもんなんだな。
「香風か？ 入れよ」

あいつは、足音一つ立てずに仕事場までやってき
た。さすが、風使いの血筋だけのことはあるな。

「珍しいわね、仕上げの時には誰も入れさせない
人が…」

「どうせダメだって言っても入るんだろ？ それに、
お前なら構わないよ」

俺はいつもの通り、火桶に鉄を入れて、ふいごで火を強くした。

「あら、颯、そのふいご…」

「ああ、さすがに名人と言われた華包じいさんの愛用品だよな。親父のとは火の勢いがちがうぜ」

「…そう…」

耳を疑った。こいつのこんな声は、今まで聞いたことがない。俺は汗を拭くふりをしながら、気付かれないようにチラと香風を見た。

…妙な顔するな、こいつ。人の顔をじいっと見て、何のつもりだろ？

「ふいごが、どうかしたのか？」

「…うつん、ちゃんと働いてるなら…いいの」

言つたり、そっぽ向いて帰っちゃった。何だったんだろ、いったい？

六

それから数日。香風は姿を見せない。うるさい奴だが、来なきや来ないで、気になるもんだ。

ま、取り敢えず鋼は出来上がったんで、久しぶりにあいつの家に行つてみることにした。

俺の家の裏つかわ。ちよつと行つたところに、香風の家がある。戸を叩くと、おばさんが出てきた。

「こんにちは、おばさん。香風いますか？」

「まあ、颯ちゃんじゃないの。随分久しぶりね…あ、あの子ね、ちよつと前から部屋に籠つちやつて、誰も近寄らせないし、ご飯も食べないで何かこそこそやってるのよ」

飯も食わずに!?!…普段のあいつからは、考えられないな。どうしたんだろ??

「そうそう、颯ちゃん。ここどころ、なにか妙な風感しない?」

「え…いや、僕は何も…」

9 第一回 風の未裔

「そう…颯ちゃんが感じないなら、大丈夫なんでしょ
うね」

「そうだ。この人も、風の血を引く一人なんだよな…」

「…ちよっと、調べてみますよ、おばさん」

とっさに口から出た。調べる当てはないんだけど、
この人のいいおばさんを、心配させっぱなしにやで
きない。

結局この日、香風には会えなかった。でも、俺には
香風のことより、おばさんが言ってた『妙な風』の
ほうが心に引つかかっていた。

七

次の日の朝のこと。俺は珍しく、夜が開ける前に
目が覚めた。…いや、正確に言えば、眠れなかつた
んだ。こういつのを胸騒ぎとでも言つのかな。なに
か、いやなことを無理やりやらされているような…
そんな気分がずっと続いていったんだ。

気を紛らわすことにして、鍛作りに取り掛かる。

注文を受けたのは、三ツ又またの鍬だった。普通なら
三つの刃を作つて、それを組み合せるところだけど、
それをやつたんじや 鑄造ちゅうぞうと大差なくなる。そこで、
俺の場合は一つの鉄から三つの刃を同時に作る。こ
れが結構むずかしいんだ。なんだって、やり直しが
きかない上に、仕上がるまでは休めない。そう、今
までみたいに、砂の中に埋めて、あとは明日…って
わけにはいかないんだ。

やり方は、まず鍛え終わった鋼はがねの塊かたまりを叩いて、
形を整える。それから先の方を強く熱して、鉄はさまで三
つに切る。切るつて言つても、せいぜい一寸くらい
が限度。それ以上やるとすると、鉄が壊れちまつ。
そこから先は、鎚で打つて亀裂を広げて行く。つま
り『ちぎる』わけだ。

…って、口で言つのは簡単だけど、鉄を鎚だけで
真つ直ぐにちぎるつてのは、時間もかかるし、相当

神経を使う。しかも、さっき言ったように、出来上がるまでは休めないんだ。俺は、十分に飯を食って、覚悟を決めてから仕事場に向かった。

いつものようにふいこで火を起こし…

と、突然どんとん、と戸を叩く音がした。

「颯ちゃん！颯ちゃん!!」

召園の声だ。それもひどく慌あわててる。俺は、急いで戸を開けた。

「颯ちゃん、来た…ついに来ちゃった!」

「落ち着けよ、召園! いったい、何が来たって言うんだ?」

言いながら、俺は思わず祈っていた。来たのが、あれじゃないように…

「遠くで、砂が舞い上がってるよ! 間違いない。あの大風が来ちゃったんだよ!!」

祈るだけ無駄だったか。

「…で、俺にどうしろって?」

召園の顔が硬直した。信じられないって表情だ。

俺は、思わず目をそらした。

「ねえ、颯ちゃん…」

「召くん、そんな意気いき地なしに頼んでも無駄よ!」

振り向くと、そこに香風がいた。体にびったりした鋼の鎧よろい: 親父のあの鎧よろいを着ている!

「その、その鎧…!?!」

その次の言葉は、あいつにさえぎられた。

「あんた、薄衣うすぎを着るのが恐いんでしょう! 風使かぜつかいいじゃないなんて言ってるくせして、風使かぜつかいいじゃないことを、はつきり見せつけられるのが恐いんでしょう!」

…勝手にやれて言ったわね。やるわよ。あたしが叔父様の敵かたきを討うつわ!

あんたなんか、一生そうしていじけてりゃいいのよ!!

一気に捲まくし立たてると、飛び出して行った。俺は、しばらく言葉も出せずにいた。

と、いきなり召園の平手打ちひらてうちが来た。

11 第一回 風の末裔

「ぼーっとしてる場合じゃないよ、颯ちゃん！香ちゃんがいくら強くたって、あの大風に勝てるもんか！
…僕は香ちゃんを手伝いに行くよ。たとえ足手まといになってもね。颯ちゃんが来るまで、何とか持つようにする。だから…必ず来てよ！」

俺は、頬を手でおさえたままで、戸を閉めた。あいつの平手が、こんなに効くとは思わなかった。

俺は、一人仕事場に戻った。砂の中から平鍬の形をした鋼を取り出して、火で先端を真っ赤にする。右手で鉄を握り、ぴったり三つに分かれるような位置に鉄を置いて、五分ばかり切った。

鋸でちぎるためには、その部分だけを熱しなきゃならない。ふいごをつまく動かして、炎を調整する。香風の言葉が何度も頭の中をよぎった。

『薄衣を着るのが恐いんでしょう！』

頭の中で五回叫ばれてから、俺は鋼の先端をもう

一度、今度は白くなるまで熱した。熔けた部分をやつとこで削げ落してから、砂の中にたたき込む。火の始末をして、仕事場の床板を剥す。一年ぶりに、地下への道が開いた。

八

焼けた木の臭いがする短い通路の突き当たり。そこに、薄衣が飾ってあった。

じいさまが着けていたのを、何度か見たことがある。薄い布を肩から羽織るだけの、簡単な衣装なんだけど、どんなに動いてもずれたりしない。まさに羽が生えたような姿になるんだ。

近寄つてよく見ると、信じられないほど薄い。風神から賜ったつても、あながち出鱈目じゃないかもしれないな…

(小颯)

俺はびっくりして、あたりを見回した。誰もいな

いはずなのに、声がする。それも、これは間違いない
くじいさまの声だけだ……

(小颯、慌^{あわ}てるでない。わしはここじゃ)

声の方を見た。なにもないじゃないか……

(よく見んか、うつけものー)

頭の中で、声が銅鑼^{どら}でも叩いたみたいに響いた。間違いない。目の前の薄衣^{うすえ}が、喋^{しゃべ}ってるんだ。

「じいさま…死んだはずじゃ」

(ああ、もう死んだよ。この中にいるのは、わしの心だけじゃ

やれ、半年かかって、やっと降りてきたの、小颯。

今年も大風の季節が来たのかな?)

じいさまの声は穏^{おだ}やかだった。生きているときそ

のままに……

「うん。今、香風^{かふう}が潰^{つぶ}しに行ってる。親父の敵をとるとか言ってる……」

(なに! 香風^{かふう}じゃと!? ……まさか、あの鎧^{よろい}を着て行ったのか?)

「ああ、そういえば……」

(あのうつけ者め! あの娘まで殺す気が)

穏^{おだ}やかだった声が、一転して叩きつけるみたいに変わった。

「ど、どうしたの?」

(あの娘には大風は御^ごせん! 大風に巻き込まれるか、弾^{はじ}かれるか…どちらにせよ、生きては帰れまいの…)

香風^{かふう}が死ぬ…死ぬだって!!

(なを愚^ぐ々^ず々^ずしておる! はやくこの衣^{まと}を纏^{まと}うて、大風を治^{おさ}めに行かんか!!)

そつだ、治められるものなら、治めなけりや。けど……

「なあ、じいさま。俺、じいさまの孫^{まご}じゃないんだよ

だから、もともと風使^{かぜつかい}いなんかなれないし、風を

治めるなんて……」

(なんじゃ、そんなことで…よいか、お前はわしの選^{せん}んだ風使^{かぜつかい}いじゃ。お前が幼い頃に、わし自身が選^{せん}んで、わしの娘の養子^{やし}にしてもらったんじゃ。

わしが死んで半年、この場所からお前の気配^{きはい}をじっ

13 第一回 風の末裔

と見とつたが、立派に風を治めておるわ。経験がないのはまあやむないが、わしの跡継ぎとしては申し分ない)

え…俺が、風を治めているだつて？

(さ、わかつたら、はやく纏わんか！こうしている間にも、香風の命が危ないかも知れんのじゃぞ！) なんだかわからないが、とにかく、俺が風使いなのは間違いないらしい。よし、それなら！

俺は、薄衣を纏つた。

衣は服に、いや体中に絡み付いてから、静かに広がっていった。試しに、あちこちを動かしてみても、衣はそれに従つてゆく。どうやら、風使いと認められたみたいだ。

九

外へ出る。誰も騒いでいないところを見ると、まだみんな、大風に気付いてないようだ。

風使いの衣装を見られると、誰かが気付くかも知れない。そう思つて、俺は村の外れへと急いだ。

走る。とにかく走る。ふと回りを見ると、あつと一瞬間に家が疎らになつていく。

「んなバカな…」

(ほつほつ。足が早くなつたのあ)

「これが、この衣の力…」

(いやいや、この衣にそんな力なんぞないわ。…風じゃよ。風がお前に力を貸してあるんじゃ)

言われてみれば、これだけ早く走っているのに、風が顔にあたつてこない。

(じゃが、勘違いするでないぞ、小颯。風はお前に仕えておるわけではない。ただお前を手伝うだけじゃ。

お前が、自分で何かをやるうとしなければ、何の力にもなつてはくれんぞ)

そうか…風が使えなかつたわけだ。俺はずっと、風

を起こすことしか考えていなかったから：

ん？待てよ。香風が大風を治められないっていうのも、ひょっとすると…

「じいさま、親父の鎧あれは…あれは一体なんなんだい？」

（あれか…あの中には、お前の父親の、風を操る力が封じられておる。大風を吹き飛ばすための力が、の

…出来るわけではないのじゃ。あの大風は、普通の風とは違うんじゃない。）

じいさまの声が、焦あせっていた。どうやら、考え事をしてる暇はなさそうだ。急がなきゃ！

十

竜巻たつまきのようにも見える。だけど、竜巻じゃない。しいて言つたら、いくつもの竜巻が合わさってきた…やっぱり、大風としか表現できないな。

恐ろしい力を持っているし、親父の体を引き裂い

た敵かたきなんだけど、なぜか、まがまがしさが感じられない。

その大風がだんだん大きく見えてきた。遠くの方に見えたゴミみたいなものが、人間の形になってくる。

「召園！」

振り向いた顔が、ぱっと明るくなった。

「颯ちゃん！…きれいだね」

俺は頭を掻かいた。この言葉だけは言われたくなかつたんだ。ちよつとだけうなずいて、回りを見回す。

「香風は？」

召園は大風を指さした。

「やっぱり、僕じゃ止められないよ。颯ちゃん、急いで！」

俺は大きくうなずいた。召園を村へ帰してから、大風に向かってさらに走る。

15 第一回 風の未裔

十一

「香風ー」

あいつの影らしいものが見えた瞬間、俺は叫んでいた。

影はちよつとこっちを向いて、すぐ元に戻った。次の瞬間、そのすぐ近くで竜巻が沸き上がる。

(跳べ颯！間に合わん!!)

じいさまの言うままに、俺は跳んだ。…いや、飛んだ。また風が助けてくれてるんだ。

感心している暇はなかった。香風の起こした竜巻は、大風に吸い寄せられ、あつと言つ間に一つになつてしまつたんだ。

無防備なあいつは為す術なく、大風に巻き上げられた。親父のように…

一瞬、ほんの一瞬だけ、俺は絶望した。

親父のように、あいつが四散して行く姿が見える

ような気がした。だが、そうはならなかった。

あいつの着けていた親父の鎧が、ぱつと弾けて、大風のを削いだんだ。

俺は、思わず手を伸ばした。少しでも早く、あいつを掴まえるために。…と、俺の気持ちを理解したのが、飛び方が速くなった。ほんの一呼吸する間に、香風は腕の中におさまる。

ぐつたりした体を、即座に横へほうり投げる。大風から抜け出た彼女は、風が支えてくれる。俺はその確信していた。

十二

大風の中は、思ったより穏やかだった。俺は吹き飛ばされるでも、風に揉まれるでもなく、ただ中を漂っていた。大風の中に入るただ一つの方法は、風の邪魔をしないことなんだ。

そう、大風は敵じゃない。中に入った瞬間から、それはわかっていた。

(大風とは、この世のすべての風の源^{みなもと}じゃ。

すべての場所からすべての風が来て、無理やり一つになっておる。本当に苦しんでおるのは、あやつなんじゃ。

だからわしらは、それを助けてやらにゃいかん。

潰そうとも、治めようともしてはいかんのじゃ。助けてやらにゃ、な)

「ああ」

このあと、どうやって大風を助けたのか、正直言っ
て俺自身にもよくわからない。ただ、分かれた風た
ちが、熱いのも冷たいのも、みんな爽やかな気分で
去って行ったこと、これだけは間違いない。

気がつくと、俺は大地に腰をおろしていた。目の前
では、いくつもの風が四方へ去ろうとしている。風

たちが互いに別れの挨拶をしているのを眺めている
と、じいさまが歌い始めた。

(すべてはここから別れゆき

すべてはここに集^といくる

集^ほったものはみな朗^はらかで

別れを惜しむものもない)

じいさまの歌は、その内容のわりには寂しげだった。

(むかしの歌じゃ。

その頃は、風使いなんぞ要^いらなかつた。

風は自ら集まり、自ら別れて行ったんじゃ。

小颯、なぜこんなことになったのかわかるか?)

「…風使いのせいだ」

そう、今ならわかる。香風を助けようとしたあの
とき、いきなり大風に近付けたのは、俺の飛び方が
速くなつたんじやない。大風の方が、俺に寄つてき
たんだ。

(そうじゃ。わしらは風を呼び寄せてしまつ。あの村

17 第一回 風の末裔

を住みよくする努力が、風たちにはいい迷惑になつてしまつたのじゃよ。

じゃがもつ、後戻りはできん。風たちに我慢してもらつて、村を護り続けるか、自由にしてやつて、村を潰すか、二つに一つじゃ。

…小颯、おまえはどちらを取る？)

俺はそれに答えず、風たちを見送つてから、香風を探しに行った。

十三

香風は目を覚ますなり、俺を指さして笑い出した。

まあ、女装にしか見えないよな、この格好は。

「おいおい、笑つこたないだろ」

「うっん、に、似合つてるわよっ…あはは、あははと、いきなり沈み込んだ顔になる。」

「おい、まさかケガでも…」

こいつは軽く首を振つてから、目線をそらした。

「あのとき、鎧の中から声がしたのよ。叔父様の声で『ああ、俺は間違つていた』って。…あだし、一体何やつてたんだろうね。何の力もないのに、つかかつちやつてさ…」

「何言つてんだい。俺だつて、驚いてるくらいだよ。正直言つて、大風の中に飛び込むまで、何とかできるなんて思つてなかつたさ」

また首を振つた。今度は大きく。

「いいえ、わかつたわ。」

あんたが使つてるあのふいご、華包のじいちゃん
が壊しちゃつたのをあんたにあげたのよ。

あつちこつちスキ間があいちゃつて、風なんてまともに出るわけがないのに…ないのに…あんた、中に起きる風をみんな味方にしちゃうんだもの！…あんなこと、あだし出来ない!!」

え、じゃまさか香風も…

「あだし、わがままだよね。」

あんたに強い風使いになつて欲しいのに、あだし

より強くなっちゃうと、なんか：いやなのよ」

俺は、吹き出しそうになった。なんだ、お互いに相手の力を妬ねたんでたんだ！

「いや、俺はお前より弱いよ。」

：あのとき、大風の中にいて気付いたんだ。俺の力つてのは、風と一緒にすることだ、つてね。だから、俺にはお前みたいに強い力、風を起こす力はないんだ」

「力なんてなくなつて、あんだ、風を味方に出来るんだもん。あたしなんかより、ずっと強いよ……」

俺は、香風のとなりに座り込んだ。

「いいや。本当の風使いは、風を作るのと、一緒になるの、両方持たなくっちゃ駄だ目めさ。じいさまは、そうだったはずだよ。」

：つまり、俺とお前の二人で、やっとじいさま並に働けるんだ」

「え……？」

香風がこつちををまじまじと見る。とっさに俺は

立ち上がったって、背中を向けた。顔が熱くなるのが自分でわかる。

「要するに、風使いは二人でやるしかない、つてこど……」

言った瞬間、俺は村に向けて走り出していた。

しばらく走っていると、村の鮮あざやかな緑が目に入ってくる。召園のひいじいさんが作った畑の緑だ。

じいさま…薄衣うすぎが笑いながら言ってきた。

（人を護まもり、風の心を慰なぐさめる。それがわしらのじゃ。）

どうじゃ、風使いは（

俺は衣に聞こえるように言った。

「まあ、悪くはないね」

それから、衣に聞こえないように言った。

「最高だな！」

あとがき

きっかけは、一枚の絵でした。

翔龍 永利途さんから頂いた、「風使い」の絵。この絵に描かれた人物は、私の「風使い」のイメージとはまるっきり違っていたのです。

細面^{ほそおもて}で色白^{いろしろ}。着流しの上に、薄い羽衣^{はごろも}のようなものを纏^{まと}った姿。そこには、「風を使って」なにかをしようという力強さはありません。むしろ「風のために」なにかしようという優^{やさ}しさが、強く見えていました。

『こんな人がいるなんて、一体どんなところだろう』

こう考えた瞬間に、この話が生まれたのです。

「嘘つけ、このタコ！俺はもっとカッコよく描かれてたはずだぞ!!」

あ、そういうこと言うのか？ ふ～～ん。没にした、香風にいじめられるシーン、復活させてもい～って言うんだあ

「……」

ま、それはさておいて。私の場合、この絵のように、なにかのイメージからキャラが出来てくるわけなのですが…

「じゃ、あたしは？」

香風は、ドラクエ4のアリーナ姫。と言っても、ゲームの中のキャラじゃなくて、音楽のほう(オーケストラ・バージョン。「おてんば姫の冒険」)からイメージを頂いています。

「…そう、つまりあたしは最初っから「はねっかえり」で考えてたワケね！」

いやその…だって、颯がアレだから、相手役はきつくないと…

わ～っ！ よせ！ 竜巻を起こすんじゃない!!!

やれやれ。とんでもないキャラ作っちゃったなあ…

味方はおまえだけだよ～、召園。

「それはいいけど、僕はたしかオマケで作ったんでしょ？」

そう、もともとはオマケ。ひいおじいちゃんの設定も、み～んなオマケ。だいたい、名前からして、何も考えずに付けちゃったんだからね(^_^)

…あれ、颯。おまえの紹介はおわったはずだろ？

「はい、召園。注文の鍬」

鍬って、え？ わ！ ちょっと待て、召園！

——再び暗転——

う～、味方がいない。ここまで書き手が^{しいた}虐げられていいのだろうか？……ま、いいか。

召園はたしかにオマケですけど、書いてるうちにイメージが付いてきたという、私としては珍しいキャラです。発想自体は単純で「アリーナ姫がいるなら、お供のクリフトもいた方がいいな」って、その程度のもんです。

(それじゃ、わしゃブライかい？)

でたな、妖怪変化！

(だれが妖怪じゃ！ だいたい、最初はわしと小颯しか出ない話じゃったろうが)

そうそう。だから、この妖怪じじいはブライじゃありません。陳舜臣氏の旅行記「シルクロードの旅」に出てきた、ガイドのおじいさんがモデルです。

(おや、そうすると、わしは中国人じゃないのかのお？)

…人種や風俗については、あまり突っ込まないでくださいよ。あっちこっちにボロがあるんだから。

「最後は、私みたいですわね」

21 あとがき

ああ、香風のおかあさんが出ちゃった。この人だけは、イメージがまったくないんです。ただ、あの香風の母親ですから…

「なにか、仰いまして？」

いえいえ(^_^;)

…あっち行ったな…まあ、ああいう人です。

さて、次の台本は…と。

「お、おい、まさか続きがあんのか？」

いまのところ、ないよ。でも、また何かでイメージ沸いちゃったら、止めようがないから。そのときは、またよろしく。

あ、あと、性格についての相談には^{いっさい}一切乗らないから、そのつもりでね

「ひとでなしっ !! 」